

部落問題文芸作品選集

第15卷

生田長江著

環 境

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第十五卷

昭和四十九年十月二十八日発行

発行者 松本富夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―二―一五
電話(〇三)(七一六)六一五一(代表)
(七一三)九二四四(夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

作者より批評家諸君へ

單に面白いと云ふだけで、何の役にも立たないものは遊戯であり、單に役に立つと云ふだけで、一向に面白くもないものは勞働であります。

遊戯はそれ自體の内に目的を有するだけであり、勞働はそれ自體の外に目的を有するだけであります。即ち前者には外存目的が無く、後者には内在目的が無いのであります。

ところで、本當に人間らしき人間の生活は、眞に願はしき生活は、内在目的を有つたものであると共に、また外存目的をも有つたものでなければなりません。勞働であると共に遊戯であり、遊戯であると共に勞働でもあらねばなりません。

道徳も藝術も、それが結局人間生活の内容をなすものである限り、單に役に立つとか、單に面白いか云ふだけのものであつてはなりません。本當の道徳は、勞働の如く役に立つものであると共に、また遊戯の如く面白いものでもあるべきです。本當の藝術は、遊戯の如く面白いものであると共に、また勞働の如く役に

立つものでもあるべきです。

勿論、發生發達の経路を比較して云へば、道徳は單に役に立つものから發足し、主として役に立つものに沿うて走つてゐます。藝術は單に面白いものに端を發し、主として面白いものを離れないやうにと心掛けながら進んでゐます。けれども、理想の歸趣に就いて云へば二者いづれも、有用にして且つ愉快なるものでなければなりません。

乃ち、世上の所謂『藝術の爲めの藝術』が、どこまでも單なる遊戯としての藝術であつて宜しいと云ふやうな主張であるならば、私は少くとも其主張に賛同することが出来ません。そして、世上の所謂『人生の爲めの藝術』が、單に役に立つと云ふだけの藝術を要求するのではなく、面白いと共に役にも立つと云ふやうな藝術を要求するものであるならば、それは實際私自身の抱いてゐる藝術上の要求にはかならないのであります。

『環境』は『人生の爲めの藝術』を要求する者の一人によつて書かれた作品であります。少くとも一步一步、所謂道徳が藝術へ近づいて行かねばならない如く、所謂藝術が道徳へ近づいて行かねばならないことを、一の信條としてゐる者の一人によつて書かれた作品であります。

『環境』の昨者は今一の信條を告白して置くことの必要を感じます。

比較的少數の人々にしか興味をもつて貰へないやうな作品が、その事の故に必ずしも藝術的に高級のもの

であるとは申されません。又、比較的多數の人々にも面白く読んで貰へるやうな作品が、その事の故に直に非藝術的なものである、低劣なものであるとは申されません。

のならば
加之、どんなに鑑賞されにくい作品でもが、文壇に提供されて差支ない如く、どんなに理解され易い作品でもが、立派に存在を許されていいものだと思ひます。單に存在を許されていいばかりでなく、寧ろ然う云ふ作品のあることが必要に感じられる場合すらも考へられると思ひます。

偕てこの『環境』は、苟くも目に一丁字あるほどの、殆んど總ての人々から面白く読んで頂くことが出来る位に、平易に簡明に書かれて居ります。しかも、かくの如く平易に簡明に書れて居りながら、尙ほ且つ十分に藝術的の作品であり得たや否や、尙ほ且つ十分に藝術的緊張と藝術的品位とを保持し得たや否や、即ち作者の冒險的な試みが十分に成功を收めてゐるや否や、作者は何よりも先づ此點に就いて、批評家諸君の御批判を仰ぎたいと思つてゐます。

一九二〇年十一月十一日

環かん

境きょう

はしがき

今歳四月下旬のある日、小石川の植物園で開かれた學士會大會の時の事である。葉櫻の下の模擬店の天ぶらやへ押しかけた善良な紳士等が、子供のやうにはしやぎ乍ら押し合ひへし合ひしてゐるところで、私は舊友のS君を見出した。大學を出てからこちら、ずつと會はないでわたのである。私達二人はかれこれ十——十五六年にもなる學生時代の無遠慮な言葉遣ひになつたり、又思出したやうに現在の中年者らしい調子に引きもどされて、飲み食ひする器をそつと下へ置いたりしながら、その後のお互の身上に起つた善い事悪い事をたづね合つたり語り合つたりした。

聞けば彼は、東北のある片田舎で五六年ばかり中學の先生をしてわたが、やがて或る動機から（『その事も、君には打ち明けたいのだが』と彼は言つた）その土地に近い某監獄ではじめて教誨師といふものになり、あちらこちらと廻り歩いた後四五年前にこちらへ歸つて来て、現在尚ほ○監獄に教務主任と云ふ役をつとめてゐると云ふ。

彼の現在の職業と地位とは、少からず私の好奇心と興味とを刺戟した。さうした方面の人々と近附きになつたことがない爲めに、辛うじて押へ付けられて来た興味だからである。私は彼が其の廣い額に酷たらしく深い皺をたたんだ第一の原因であると云ふ、彼の細君の『お話にもならない』と云ふヒステリーの話へ、またしてもまたしても引き返したがるのを、稍や思ひやりなく牽制してまでも、監獄の中の有様や囚人の生活や其經歷なぞについて、かねがね知り度いと思つてゐた事の色々を、あとからあとから追掛けて問ひたづねた。

散會のあと、谷中の方へ歸るべき私が、わざわざ廻り道をして飯田橋まで彼に伴つたほどの私の熱心は、遂に彼自身をも熱心には置かなかつた。熱心に、そして（こんな場合どんな人にもでもあり勝ちな、極めて自然な事ながら）いくらかは得意げに話してきかした面白い數々の話の中にも、とり分け私の興味をひいたのは『鈴が森、お濱殺し』の事件で世間を騒がした有名な岩井宗吉の話であつた。

『さうまで君が興味をもつてゐるなら』と、電車の停留場で別れる際にS君は、半ば獨言のやうに言ひ出した。『あいつを一つ御目にかけるかな——宗吉自身の書いた傳記、自叙傳をさ。』

「宗吉の自傳？」と言ひ乍ら、S君が近づいて来る電車に其儘飛び乗つてしまひさうなのは、
ら、は、ら、し乍らさいいた

「本當は僕の勝手に、あまり人に見せるわけにも行かないんだが——」
「でも、そいつは是非、是非見たいものですな」

『ぢや今晚内へ歸つて——明日でも、小包にして送ります』と言つてゐる内に彼は、苛立たしく彼の歸りを待つてゐる細君の事をでも急に思ひ出したらしく、表情のない黙禮を一つしたきり、あとをもふり向かず駆け出して行つて、もう五六間ばかりも動き出してゐる電車の後部へ跳び乗つた。

斯うして別れた翌々日の朝、約束の物はS君の處から送られて來た。それに添へられた手紙によると、死刑囚宗吉の自傳は、彼を幾度となく獄中に訪づれ、慰め、勵まし、導いて遂に主イエス・キリスト下の御名に入れた加奈太の婦人宣教師ミス・テイイラのすすめに依り、『神の榮を彰はし、人の靈を救ふ』上に役立つことの爲め、大正七年四月十一日死刑の宣告を受けて後六日
目から書き出され、同年六月二日までに書き上げられたものである。そして右のミス・テイイラ

アへ託されたものであるが、八月十七日宗吉刑死の後、はじめて通讀することの機会をもつた彼女は、それが期待されてゐたのとだいぶ異つたものであることを發見して當惑し出した。けれど、此信心深い清教徒婦人には、宗吉自傳の如き赤裸々過ぎるほどの人間的證券を世間に公表するのが、果して『神の榮を彰はし、人の靈を救ふ』上に役立つものかどうか、疑はしくなつて來たのである。

さればとて燒棄することも出來ず、ほとほと持てあまされたる宗吉自傳は、ミス・テイイラアの手から彼女及び宗吉の雙方を知つてゐる私の友人S君の手へ送られて來た。自分一人の思案にあまつたから、御一讀の上何等かの上分別を出していただきたいと云ふやうなわけであつた。然るに、その後間もなく彼女は、ミッシヨンの都合か何かで朝鮮へ渡り、更に支那の長江沿岸を上つたり下つたりしてゐたが、只今では生れ故郷の加奈太に胸部の病をやしなつてゐると云ふ。

環
境
私は今、遠くに離れてゐるミス・テイイラアの許諾を得ないのは勿論、友人S君に一應の相談さへしないで、ここに此岩井宗吉の自傳を公表する。相談したところで同意してくれさうにも思へないからである。明白に不同意を表示されてから、尙且つそれを押し切つて公表することの困

難を避けたいからである。

私とても友人の迷惑といふことを全然考へないではない。後日ミス・テイイラアからのものつとも至極な抗議が来るかも知れないこと、それをも思はないではない。

けれども、我が岩井宗吉の一點蔽ふところなき犯罪史は、人並の義理を心得てゐる筈の私をして右の如き遠慮會釋を悉く抛擲せしめたほどに、私の心を疊惑し去つたのである。

詐僞や横領や竊盜や強盜や放火や殺人や強姦や、斯うした忌まはしく怖ろしい色々の悪事を、人が何故に如何にして犯すやうになるものか、所謂犯罪人が通常人とどう異つてゐるか、又どう異つてゐないか、これらの問題を宗吉の自傳の場合ほど深刻にしかもしみじみと考へさしてくれらるものはない。私はこれを私自身が考へさせられたと同じやうに、世の中の總ての眞面目な心をもつた方に考へて頂きたい。

私は今、この願望一に私の胸を一杯にされてゐる。私の全身がその爲めに燃え立つてゐる。その他の何物をも念頭に置くことが出来ない——友人S君の迷惑をも、ミス・テイイラアからのやがて来るかも知れない抗議をも、否、それらの物を無視し去つたことに對する世間からの激烈な

非難の事をも。

宗吉の自傳は、所々に、誤字を訂正し、脱字かと思はれるものを書き入れたのと、末段に近く宗教的感想の稍や長過ぎるやうなものを削除したのと、これらの僅かの事をほかにしては、何等のなまなかな改刪を施さなかつた。括弧の中の寧ろない方がいいかも知れない六號活字だけが、私の加へた蛇足なのである。

一 かへり討

ミス・ティイラアはじめ教師師の方々御役人の方々まで、いづれも私が生れ變つたやうな人間になつたと仰しやつて下さいませ。クリステイアンの中のクリステイアンである時まで仰しやつて下さるさうにござります。そして私に是非是非これまでの生涯の懺悔を、身上話を有體に包まず書いて見よといふ、ミス・ティイラアからの折角の御言葉でござります。

環　　これまでの生涯を、ただもう悪い事ばかりして來たのだと晩播きにやつと氣がつかまりましただけ
境　　の、何一つ人間らしい働きをもいたした事のない私の、取るにも足りないやうな身上話なぞが、

果して世の中のためになりまするものかなりませぬものか、その邊は總じて私一人の分別にあまつた事でござりまするけれども、兎も角も折角の御勸め故、何もかも神様へ御委せ申しした心になり、一通り書いて見ることに致します。

私は高等小學の三年まで参りましたきり、その上の正式な教育は受けて居りません。ただ度々御厄介になつた監獄の中で、前後を通じて十數年の間に、何かと有り難い書物を讀まして頂いたお蔭で、斯様に四角い文字のいくらかは人様並に列べることも出来るのでござります。それに今回こちらへ参りましてからは、教務主任のS様（宗旨は羅馬字で書いてゐるのでないが私の友人のS君の事らしい）が講談小説などの類もたまには讀めよと仰しやつて、色々の書物を御貸與下さいましたので、自分でも大層ためになりましたやうに思ひます。

けれども何せ、これ位の素養の乏しい私故、これより書き出します身上話も、なかなか思ふやうには参らず、定めし御讀み苦しい事ばかり多からうと思ひます。十分に書き足りないところ、筆の滑つたところなど、萬事御推讀御容赦をねがひます。別して書き進みまする内に、自然いけぞんざいな失禮な言葉遣ひになるやうなことがございませうとも、何卒何卒御容赦を願ひますで

ござりまする。

公明なる第二審の法廷に於て、死刑の宣告を受けましたのは四月十一日、今日が丁度六日目でございます。そもそもいつ御執行下さいませることか。慣れないこの筆でぼつりぼつりと書いて参ります事故、どの邊まで書き了せませますものか。その日が来れば何處でも其儘皆様とも御別れでございます。

しかし乍ら、ミス・テイイラアはじめ御一同が仰しやつて下さいませるやうに、しつかりした安心立命も何も出来て居りませぬ私にとつては、いよいよの其日の來ますまで、神様へ御祈りを致したり、こんな書き物をでも致したりして、成るべく餘計な事を考へないやうにして時を過ぎしまするのが、一番過ぎし易いやうにござりまする。

瑛 借て私 は明治十三年八月二十六日、島根縣松江市に生れたのでございます。安來節の文句で皆様御承知の松江大橋を南から北へ渡り、直ぐに左へ折れて三四丁ばかり行つたところが私の家で、裏の離れからは畫にかいたやうな——皆様がさう仰しやるやうでござりまする——宍道湖

の景色が見晴らしになつて居りました。別して夏の夜なぞは、賑かな涼船がつい目の下を行つたり來たり致します。それに調子を合せてどつかの二階から尺八など吹出しますのを、次ぎ次に面白がつて居りますと、まだ寝ないのかまだ寝ないのかと申して、年寄がしきりにせき立てたものでござります。又秋口なぞ湖上を立てこめた朝霧の間から、小さな蒸汽船がむくむくと姿を現はして來るのを、その汽笛に夢を破られたばかりの寢床にはらばひ乍ら、障子越しに眺めたことなど、今でもありありと覚えて居ります。(此頃の宗吉自身の小さな生活も、丁度その蒸汽船の如く穩かな平らかな路を辿つてゐたのが想像される。)

家のしやうばいは紺屋でございまして、二三人乃至四五人の奉公人から、父、母、父方の祖母に至るまで一家残らず爪端を染めて、いつも藍麩のまはりを往つたり來つたりして居りました。

一家残らず爪端を染めてゐたと申すに付けても思ひ出しますのは、但馬から來てゐた奉公人の喜之助と申すのが、男ながらに黒々と齒を染めてゐたことでございます。まるで女のやうな聲をする、それでゐていつも氣の軽い面白い男で、毎日の仕事が済んだ夕方や休みの日などには、きまつたやうに私を連れて賑かな處へ遊びに行きました。それも滅多に履物なんぞ穿かして呉

れず、大抵はうしろからひよいと抱き上げて、私の柔かい兩脚を自分の右左の肩へ引き分け、所謂肩車と申すのに致し、どこへ行かうとも言はずに出かけるのでありますが、私も兩手でしつかり喜之助の頭につかまり乍ら、行く先きを樂しみにして居りました。

もつとも七つ八つ位から後は、流石に私もさうして連れ出されるのを喜ばなかつたのでありますが、喜之助は却つてそれを面白がるやうな様子で、またしては肩車にのせのせいたしたものでございます。

喜之助の話を斯様に長々と書きまするのにも、實は理由のある事なのでござりまする。私共一家の本當に大黒柱であつた父の事、父の亡くなりました時の事なぞ申上げるのに、幾分關係があるからでござりまする。

環 忘れも致しませぬ。この私が十一歳になりました春のこと明細に申上げれば明治二十三年四月十五日のこと、丁度その頃松江に来てゐた上方役者の芝居を見に、いつもの如く肩車に乗せて連れて行かれた私が、不思議な舞臺の有様をその儘目に残しながら、同じく肩車に乗せられて歸つて來まする途中、向うから夢中に駆け出して參つた家の定次郎と申すのに、ばつたり出會つ